ひとりの「事実」を探す作品制作
—酒田市の戦後船乗りに焦点を当て行った取材記録と文献調査から—

大野 高輝　Ohno Kohki

修了制作「the man」

私の祖父は、昭和 31 ～ 36（1956 ～ 61）年の 5 年間、17 ～ 22 歳まで商船に乗りコック見習いをしていた。私が幼い頃、彼は私によく当時の話を聞かせてくれていた。

祖父と死別する間際、彼は「酒田によくお世話になったお寺があった」と言っていた。しかし私は、そのときはその言葉をあまり気に留めなかったし、それ以上詳しく話を聞かなかった。

彼はキリスト教徒でもあった。キリスト教の葬式は、馴染みのあった仏教のそれとは全く違っていた。キリスト教では、初七日も四十九日も何回忌もなく、教会へ運ばれたら、その瞬間に神のもとへ逝ったことになるらしい。とても親しいと思っていた人と今まで経験したことのない、知らない別れ方をした。彼が信じていたキリスト教についても、知った気になっていたが全然知らなかった。

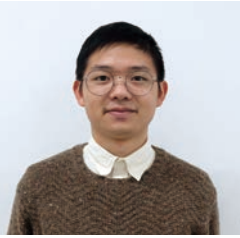
その時ふと、彼が酒田でお世話になっていたというお寺のことを思い出した。なぜ酒田でお世話になっていたお寺があるのか。酒田は港町である。船乗りをしていたことと何か関係があるのだろうか。疑問は浮かんでくるが、なぜなのかはわからない。——私は、とても親しいと思っていた人のことを、実はよく知らなかった。

そのため私は、彼が昭和 31 ～ 36（1956 ～ 61）年の 5 年間、船乗りだったことを手掛かりに、本人から直接聞くことのできなかった「祖父」を探しにいくことにした。

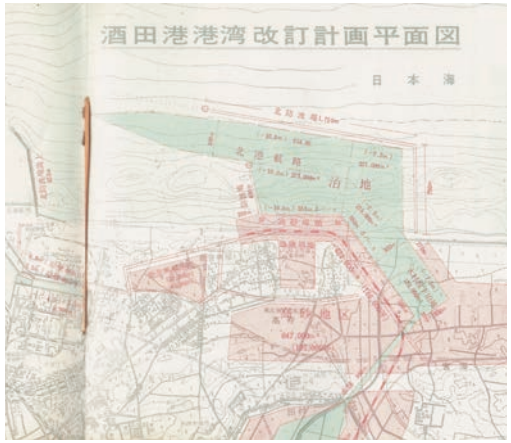
概要

親しい人の知らなかった一面を探そうと思い立ち、およそ 1 年間、山形県酒田市にて祖父の痕跡を探した。結論から述べると、彼がなぜ酒田にある寺院でお世話になっていたのかという、初めに抱いた疑問を明らかにすることができなかった。寺院でも、また商店街でも、私の祖父を知る人に出会うことはできず、その手がかりとなりそうな文献も見つけ出すことはできなかった。つまり私は、酒田において祖父の個人史という、あったかもしれない「歴史」を、探し出すことはできなかった。

この修士制作では、祖父について必ずしもはっきりとした「事実」を提示しない。「探す」というプロセスで得た、証言と文献記録を重ね合わせることで、祖父が船乗りをしていた時代の、酒田市と船乗りについての輪郭を表面化していくことを目指している。即ち、ほとんど記録を残さず消えてしまった人物について、酒田で集めたいくつもある「事実」を重ね合わせていくことで、そのズレの間に当時祖父が見ていたかもしれない酒田の輪郭を立ち上がらせていこうと試みた。



1994 年愛知県生まれ。2018 年名古屋芸術大学卒業。学部生のときには、滞在場所の風景や遭遇した出来事を感覚として捉えて、アクリル絵の具や紙、テープなどを用いて、色とかたちで組み立てた抽象的な絵画を制作。
大学院進学後は、これまで感覚として捉えてきたことが一体何なのかを探求。他者へのインタビューや文献調査を行う中で、人やモノによって語られる過去の記憶や記述の曖昧さに注目する。それらの物語がひとつの「歴史」となるような作品を制作している。



「the man」
2020年
写真、テキスト、ドローイング
紙、木、カメラ

修了作品